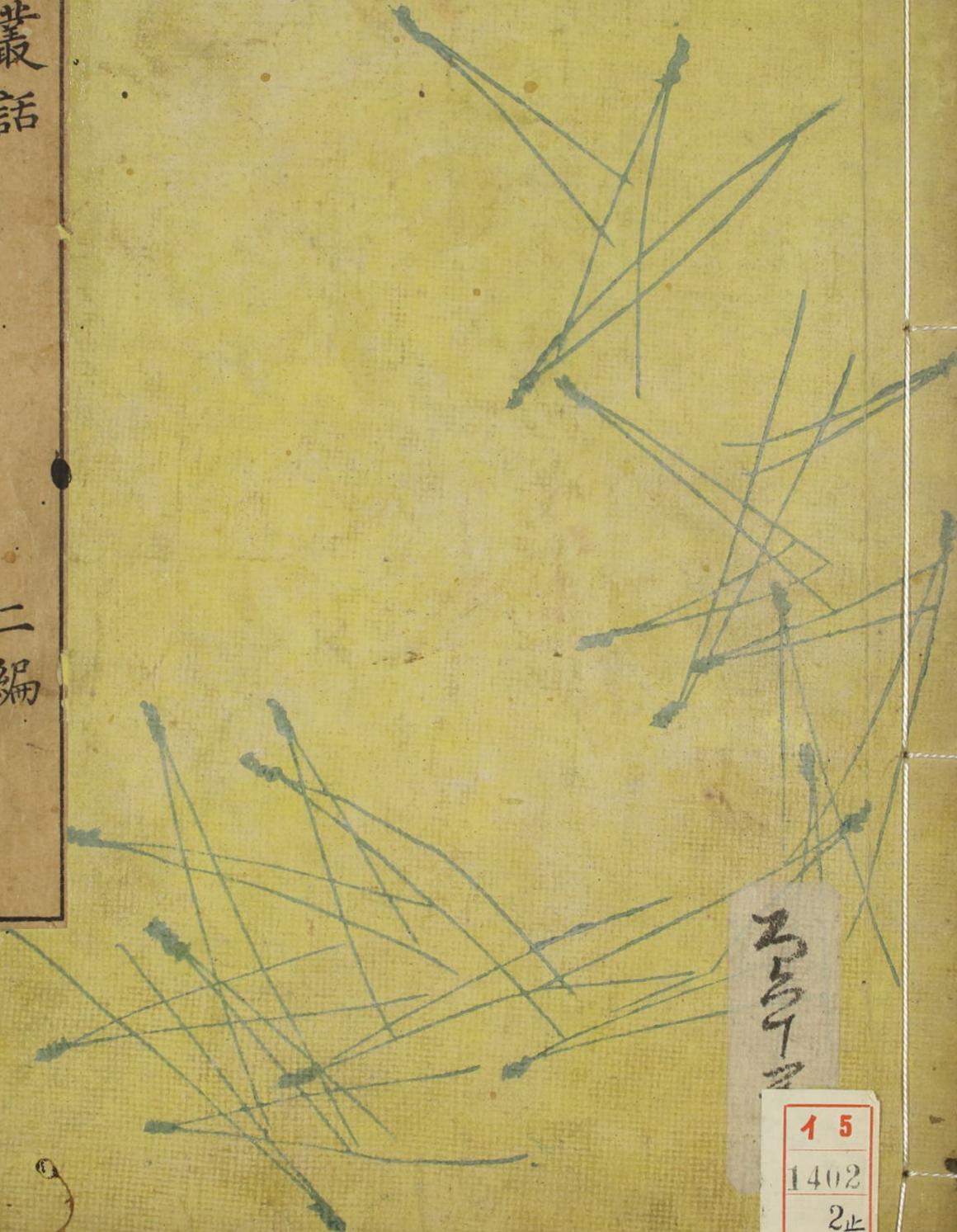




松屋叢話

二編



1402

15  
1402  
2止



11  
1402  
2



松屋叢話卷第二

目録

石敢當の考

三嶋自寛が歌

平澤元愷が文章よもぎもたりの話

太田元貞經學よもぎもたりの話並詩

太田敦が詩

太田氏の女晋が詩

太田氏の兒玄齡と如晦が詩

筑紫の僧が海賊と遇て歌よめりの話

甲斐國の百姓が名歌よめける話

栗田口邊よめり〜乞食が歌



高田早苗  
三十四年二月十日

松屋叢話卷第二

目録一

道三法印紹巴法橋贈荅歌の話

大窪行が詩聖堂建一話

大窪行明人婁堅が真帖を賒得する話

糸井翼が詩

正木十幹が墨田川あてのありき歌

正木十幹が夢よ歌をよめる話

栢木昶が詩

卷大任が詩

おほしこの人は序跋など乞まらざる話

茶其馨が書法世よきとられし話

上野國桐生人佐羽芳が詩並その里に近き

そよめる大巖中人の聯句の詩はくま話

清水濱臣が歌よめづるありき詞よめる話

清水濱臣が師の歌を改人と企し話

墨田川よそありき花は薩の話

太田元貞深川木場あき詩はありき話

ある人清水濱臣が歌の解をほらりし話

菊池桐孫が詩並五山堂と号せし話

中村佛庵がそよめる天竺佛像の話

菊花のちるといふ事

八幡宮の御名の考

松井玄輔が詩

山本謹が詩

細桃女史と翠雲女が画よそとられし話

美濃國大垣人江馬蘭齋が女の詩

清水濱臣が歌

梁卯が詩

御國の稱は皇國と書をうるも、（？）の事とて、（？）の事

古書より、（？）雅字を撰べき事

*(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)*

松屋叢話卷第二

江戸 源與清文儒著

美濃 梁卯伯兔校

石敢當セキガシといふものは、今もなほ所々に残りてあり  
りり。集古十種碑銘部六の卷。肥後國石敢當。  
高サ三尺八寸四分。幅一尺三寸一分云云。橘南谿が  
西遊記一の卷。薩州鹿古嶋城下町々、此行當。  
或は辻ツジ街チヤウなどあり。必高サ三四尺計なる石碑  
あり。石敢當といふ文字を彫付たり。いふは、  
ゆゑと所の人と問に、昔より致し来りたる事  
あり。いふは、ゆゑといふ事とて、（？）後、（？）畷耕  
録とて、（？）此より出たり。其文曰、今人家正門適

當<sub>テ</sub>巷陌橋道之衝則立<sub>テ</sub>一小石將軍或植<sub>テ</sub>一小  
碑鐫<sub>テ</sub>其上曰石敢當云云薩州は日本に極西南  
に在<sub>テ</sub>て唐土に近<sub>ク</sub>む<sub>リ</sub>を船の往来も自由な  
ら<sub>シ</sub>む<sub>リ</sub>彼地あり<sub>テ</sub>見及び來<sub>ル</sub>る<sub>ル</sub>  
此地に作<sub>リ</sub>置<sub>キ</sub>又田畠に石あり衣  
冠の像を彫<sub>リ</sub>て居<sub>ス</sub>田夫と<sub>シ</sub>ば田の神之<sub>ト</sub>  
い<sub>フ</sub>も彼畷耕録に<sub>テ</sub>石將軍に類<sub>ス</sub>  
日本に衣冠の像に<sub>テ</sub>伊勢など<sub>ニ</sub>ハ石を  
皆他國あり<sub>テ</sub>は<sub>シ</sub>え<sub>ル</sub>もの<sub>ト</sub>伊勢など<sub>ニ</sub>ハ石を  
將棊の駒に形<sub>ヲ</sub>作<sub>リ</sub>て山神と彫<sub>リ</sub>て村里に  
出口あり<sub>テ</sub>必あり<sub>テ</sub>是も他國あり<sub>テ</sub>おほ<sub>ク</sub>  
え<sub>ル</sub>もの<sub>ト</sub>石敢當を京高辻天満宮に社前

に昔はあり<sub>テ</sub>とい<sub>フ</sub>人あり<sub>テ</sub>今<sub>ハ</sub>云<sub>フ</sub>百井  
塘雨が<sub>テ</sub>埃埃隨筆五の卷に薩州鹿兒島に町々  
行當<sub>ト</sub>街の<sub>ト</sub>なる<sub>ル</sub>所あり<sub>テ</sub>必<sub>ズ</sub>三四尺<sub>ノ</sub>あり<sub>テ</sub>  
なる<sub>ル</sub>一石碑を立<sub>テ</sub>石敢當<sub>ト</sub>三字を鐫<sub>リ</sub>あり<sub>テ</sub>  
あり<sub>テ</sub>問<sub>フ</sub>人あり<sub>テ</sub>後<sub>ニ</sub>畷耕録に<sub>テ</sub>  
十七の卷に曰<sub>ク</sub>今人家正門適當<sub>ニ</sub>巷陌橋道之衝則  
立<sub>テ</sub>一小石將軍或植<sub>テ</sub>一小石碑鐫<sub>テ</sub>其上曰石敢當  
以<sub>テ</sub>厭禳<sub>ス</sub>之按<sub>テ</sub>西漢史游<sub>ガ</sub>急就章云<sub>ク</sub>石敢當顏師古  
注<sub>ス</sub>曰衛有<sub>リ</sub>石碯石買石惡鄭有<sub>リ</sub>石制皆為<sub>リ</sub>石氏周  
有<sub>リ</sub>石速齊有<sub>リ</sub>石之紛如其後以<sub>テ</sub>命<sub>ス</sub>族敢當所向無  
敵也據<sub>テ</sub>所<sub>ノ</sub>說則世<sub>ニ</sub>用<sub>ル</sub>此亦欲<sub>シ</sub>以<sub>テ</sub>為<sub>リ</sub>保障<sub>ノ</sub>之意  
云云薩州の外他邦に<sub>テ</sub>見<sub>ル</sub>る<sub>ル</sub>ことあり<sub>テ</sub>徐氏筆精に

いふ所もあまのいぢなり。或曰。京高辻天満宮社前  
先年ありしといふ。今ハたゞ云云。自注あり。此社は  
二條より北一町を行當りて。此石が有地也云云。  
伊藤長胤が蓋簪録四の卷。雜載篇。史游急就  
篇。列諸物名稱。以課程學童。其中設入姓名有  
石敢當。師古注曰。敢當言所當無敵也。王應麟  
補注曰。孟子曰。彼惡能敢當我哉。胤按。後世名  
當門神。曰石敢當。其名取于此云云。藤原貞幹が  
好古日録一の卷。肥後國ニ立ル所ノ石敢當。  
其字大サ尺餘。其書奇古。打本希ニアリ。何ノ人  
何レノ年ニ立シニヤ云云。自注。郡及邑ノ名ヲ忘ル  
云云。たゞいふも。五代史十の卷。漢本紀あり。

高祖睿文聖武昭肅孝皇帝。姓劉氏。初名知遠。  
其先沙陀部人也云云。與晉高祖俱事明宗。為  
偏將。明宗及梁人戰。德勝。晉高祖馬甲斷。梁兵  
幾及知遠。以所乘之馬授之。復取高祖馬。殿而  
還。高祖德之。高祖留守北京。以知遠為押衙。潞  
王從珂反。愍帝出奔。高祖自鎮州朝京師。遇愍  
帝于衛州。止傳舍。知遠遣勇士石敢袖鐵槌侍  
高祖。以虞變。高祖與愍帝議事未決。左右欲兵  
之。知遠擁高祖入室。敢與左右格鬪而死。知遠  
即率兵盡殺愍帝左右。留帝傳舍而去。とあると。  
事文類聚後集十八の卷。勇敢の部。石敢當と  
標出。明人徐勣が徐氏筆精六の卷。事解に





耶中御幸日七十二騎是先驅他家孫子今猶  
古音獨寒酸一腐儒。その監物を茶藝よやど  
ちよ名を得て世は宗易門七哲とよむれ  
人の子孫いふありて氏を大田とあつて加賀  
國のあつてしりしもの。元貞のころも孔道乃  
學はたもつて九經の旨を推明らえはしむ  
多しといはれり。博士といはれり。そのころは  
とらふもつて。硯よさしむる。紙よ打のぞめる。あ  
らむ。とらふ。文字とあつて。文章とあつて  
ぬ。見る人あつてやとあつて。そのころは  
心とせしむる。時とあつて。そのころは  
出るといはれり。古といはれり。打誦といはれり。そのころは

春日病中といはる題よ。芒鞋何日訪山家。抱病  
連旬負物華。想像林園芳。世界春風今到幾番  
花。野水よ。一叢垂柳野村春。春水縱横不  
辨津。昨夜雨過深數尺。揭衣難渡訪花人。  
暮春散步江邊よ。風日晴和春更闌。詩翁行樂  
傍江干。神祠佛院又何擇。凡有花家必入者。  
花後又過野村よ。春深何處不消魂。流水小橋  
前度村。一路風光花已盡。綠陰滿目易黃昏。  
らる。今といはれり。春の詩と。余が耳よつる中に  
たつて。残せしむる。

大田魯三郎敦字は叔復號を晴軒といはれり。  
元貞が次の子とあつて。そのころは。經學よ心をこめて

大 論語。孟子。周易。此論議書。隨筆。二卷。初夏偶成の詩。緑葉陰陰。清晝長。薔薇花發。有幽香。茅堂坐睡。閑無事。斯裏樂如。南面王。書懷。窮巷書生。難得君。雄飛何日。冲青雲。晚汀水落。釣磯出。早買漁蓑。入鷺群。

大田氏晋は元貞が第四女あり。字ハ景昭。號と蘭香とをいける。行書ハ妙。梅邊歩月といふ題。偶訪幽香野渡東。閑吟停杖立。春風水流清淺。黃昏月身在。橫斜疎影中。たる詩をいり。菊池桐孫が讚。大窪行々。野梅の詩。

竹柵茅簷野渡頭。幽姿一樹映寒流。春風桃李滿城錦。梅與春風風馬牛。

大田元貞が五男と。渡那四郎と。名を玄齡。字は季喬。年十四。詩をいり。妓家花の詩。千樹嬌櫻披絳霞。春風馥郁入娼家。美人相對倚樓處。醉眼難分誰是花。題画。蘆洲雨霽水流肥。一抹淡烟偷翠微。孤鴈數聲秋色靜。漁舟空載月光歸。弟と金剛五郎。名は如晦。字を季明と。年十三。詩稿已堆。田家春雨と。細雨茫茫柳色新。輕風吹處水為鱗。紅綻村村春富貴。短蓑多是訪花人。暮春と。澹雲不散雨霏霏。數樹垂

楊吐嫩金訪花心被讀書惱九十春光已綠陰  
なごほくをさしあく此はくくはがえおひさる  
ていへくをさしあく此はくくはがえおひさる

筑紫の僧が都への旅りくもた。海賊ありくかきり  
し物のしきうもてきり。世人きんくして  
まごほくくくくく

くもくは海をくもくくも深の神もくく  
沖のく浪もくくくくくくくくくく  
あたまくくくくくくくくくくくく  
やつく和尚位の宣もくくくくくく

享保の頃甲斐國の民がくありくく  
おひさくくくくくくくくくくくく

みくくくくくくくくくくくくくくくく

栗田口もくありくくくくくくくくくく  
カタ井  
く食もくくくくくくくくくく

ぬるるくくくくくくくくくくくく  
あめくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくく

道三法印八十八はくありける年。春のくくくのくはよ。  
この年を八十とせあり八のくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくく  
あめくくくくくくくくくくくくくくく

大窪行字天民は常陸人。その號とバ詩佛といふ。

名をさそえし。江戸柳屋の池。詩聖堂。死不休。齋艇樓。小黃香茶寮。江山詩屋。翠錦屠蘇。清淺池。納涼橋。荷花世界。蘆花淺水。蓴蕩。蓼花灣。綠雨亭。黃葉坡。柳地。青裳步。含雪窓。苦竹叢。小釣臺。瘦梅庵。と。頼基の天孔橋立。融大臣の塩竈の浦。中書王の花園や。夢窓國師の十景のあそび。水石。心を。

大田元貞。玉池精舎の記を書いて贊。ある時蘆花被を詠。詩。翡翠鴛。好寧足羨。輕如柳絮。軟如綿。風流只合將詩博。好事何妨作画傳。一枕清愁聞笛卧。滿船香夢伴鷗眠。最宜釣罷歸來擁。正是江村月落天。と。ある人大窪行。明人妻堅字子柔。賀卓。明府序。孔真蹟一帖。と。來。世。妙。此帖を得て。近頃伊勢人。韓天壽字大年。と。



へさずなりぬ。千幹あなをくぐり孔の  
 押してある。ある夜の夢よ  
 びこ色孔小簾もさるあつた人乃  
 あつたさうけり。あつたさうけり  
 いあへるあつた夢のたけり。あつたさうけり  
 かなはあやしきさうけり。あつたさうけり  
 江戸人栢木祖字永日は。號を如亭といひくると  
 のうらうらよと名高くさうけり。あつたさうけり  
 あつた妙なりき。家とさうけり。あつたさうけり  
 詩よ。頭髮除来恰歲除。明朝且喜不須梳。腰間  
 欠久新磨劍。麓底焚空舊妓書。守歲燈寒游子  
 様。迎春薰冷野僧如。胸前俠氣都銷盡。儘容罵

来呼禿驢。けり。けり。けり。都よのけり。あつたさうけり  
 一路関開始解鞍。帝城高在五雲端。袖中  
 行卷無佳句。不説胡琴我善彈。のあつたさうけり  
 わつたさうけり。の國ありさうけり。あつたさうけり  
 越後國新泻人卷大任字致遠は。號を弘齋と  
 いひくると。あつたさうけり。あつたさうけり。栢木祖よ寄  
 る。詩よ。山人吟嘯今何處。故里頻年雁影疎。吉  
 備精廬見人説也。留一鶴守琴書。  
 學者の大業は著述よ。あつたさうけり。あつたさうけり。旁註。標註。増  
 註。刑補。校訂。あつたさうけり。あつたさうけり。あつたさうけり。あつたさうけり  
 みる。あつたさうけり。あつたさうけり。あつたさうけり。あつたさうけり。あつたさうけり  
 さうけり。あつたさうけり。あつたさうけり。あつたさうけり。あつたさうけり。あつたさうけり

松屋叢言卷第二



あとも持てんを。つらまうんを。さて此高慢懶  
隋孔輩はいつちのよ。その酒のそとのう友  
そのう。その友。月花見る友。そののうせてなく  
そのうん友。詩よ歌よ。はくせく見人友。舟う  
あまふ友。野よ。と。い友。財よ。時の友。

波多野源藏泰其馨ハ。號を星池とも。爾如齋との  
いしり。手かく。を好て。はく。細井九皐が  
門よ。祖父某も書法を好て。九皐が父の  
細井廣澤が門人なり。そのゆゑを。その  
九皐あま。う。い。九皐身も。う。後ハ  
東江源鱗。關其寧等が門よ。立のう。い。はり  
し。西蕃の書法よ。う。成なげさ

し。十年あま。と過せ。時あ。長崎よ。お  
む。貢舶に異人徐荷舟。劉培原なる。に  
む。は。わ。か。お。真。と。と  
得。此二唐人等。里なる。姑  
蘇人胡兆新とい。書。を。と。と  
その。真帖。其馨よ。附屬。あ  
その。其馨が書法日々。今  
を。其馨常よ。今  
その。晋唐宋明の古搨本と本  
則。得。千臨百摹  
せ。法帖。筆法の真面目と。と  
その。古法と。は。ん。つ

〇〇〇〇〇〇。己は今此清人の真帖より見たらば  
 〇〇〇〇〇〇。その筆者の一人はあつたとい  
 〇〇。其のいづれかの遺風を存しつゝ。さうに  
 〇〇本よまされしつゝ。あつて清人の書法を  
 得る後。晋唐よとののり人も又うゝか。とて  
 古搦本よつゝ。まじへる筆をぞつゝ。其馨  
 長崎より純羊毫を得るか。と。ほゞ。えん  
 江戸此書家を示せし。一の。と。えん  
 〇〇の。其馨を。と。えん。ひ。今  
 清人の。此筆を。か。中  
 の書家小文筆の。を。えん。ぬこと。  
 彼域の風よ。の。と。證。實。の様此

書かた。わ。と。小文筆ハ福州此  
 製な。と。琉球人の用筆に。と。清國  
 せ。と。筆か。と。元旦試筆よ  
 〇〇〇〇。三盃椒酒我神怡。醉裏揮  
 毫。若。馳。笑。世。亡。羊。硯。田。上。本。斯。小。道。不。多。岐。  
 上野園。桐。生。人。佐。羽。芳。字。蘭。卿。號。と。淡。齋。と。之。と。  
 〇〇〇〇。妙。と。松。濤。茶  
 寮。と。作。詩。松。影。暗。窓。櫺。濤。聲。在。半。空。蒼。低。常。  
 礙。月。簾。薄。不。遮。風。遣。興。詩。多。味。驅。眠。茶。有。功。主  
 人。何。所。慕。自。比。竟。陵。翁。〇〇。閑。居。〇。世。事。紛。紛  
 擾。似。雲。此。生。堪。懶。不。堪。勤。田。園。已。熟。桑。麻。計。丘  
 壑。將。追。麋。鹿。群。一。枕。夢。後。閑。處。結。四。檐。雨。向。靜

松濤茶

中間始知居易身殊健。酒量近来添幾分。此外  
おほく著せる詩集よ見ゆ。桐生の里近きほど  
よ小倉山といへるがありと。せとせ大窪行。館彫  
梁卯。筑井鑑。廣瀬潔など打はきてのほり  
るよ。あつり四方の遠山の。十ありあり  
ぶえくえく。家を立て十山亭と名  
づく。大窪行のしるし。人々  
うへむ。今よは。十山は日光  
赤城。三國。榛名。碓氷。妙義。破風。三峰。富士。浅間  
あがわりの。この道は。川よ  
の。大巖あり。その下は水と。淵  
あつり。大窪行のしるし。人々

流し。人々巖の上見ん。荆棘が中を。けつ  
川を右方に見たり。川の峯と。のぼり  
さり。筑井鑑を。肥て。あつり  
心よ。筑井鑑と。打つ。川の浅瀬を求て。  
彼面此面よ。巖の上を。集る。その  
時大窪行。坡陀下。盡水  
之涯。茶菴。途窮。欲進。直履。巖。駢。栖。鵬。堪。唾  
二客。不能。隨。の二客と。筑井鑑と。梁卯  
と。茶など。煮く。し。し。  
あつり。聯句。



その歌大江戸とある。品川少林院の會は  
時の兼題の奇なるもの。かく舟のつぎりやを  
げくまもをもく三十一のうらまほせんもの  
今の世よいましことあるべしむとく。平春海の  
世よおはせしはむさきむしもの世しむ。

村田春海の神祇の題あり。

國にける神の意のや今も人繩なること  
堂のたふとものまをしりぞく孔と。琴後集  
よもししなり。そいひのうらまほせんもの  
うらまほせんよ。はぐり此集の校合を小林氏  
あたらしくしものようしきむしやゆもせん  
えびよ加いしと後よ。清水濱臣がらん。

神の意の詞あり。くもあはむとて。神の意  
と改くはしんす。いひなるよむし心もあはく  
おしなり。はぐりあをほすしと。此歌出雲  
風土記の國引の故事とあり。ものまをし  
濱にがりの名その繩手車の故事よ。あれとや  
おしん。急いとのさりと清音よ。むしむ  
とわさむし。そいひ。夜鶴繩手車よ。と孔  
柳のほろをなさん。むしむし。ゆもせんもの  
さしむし。おしむし。ぬとんえん  
むしむし。急いとのさりと。繩なるもの詞相  
あはむ。はぐり。此詞をよものまをし。なぐり  
ゆもせんもの。雑劇本を引くしと。

師の立ちあがりぬる歌人あり。藍より出て。藍の  
 青しといふべし。さて余が癡心をもて解せん  
 ろる。蘭の松山の風景を。神の書きし。画  
 見せし。同記秋鹿郡の條。有國形如  
 畫鞞哉と見え。仲哀紀。韓國の山を少女  
 神の画ともいひたるらんや。小林氏もか  
 るり心得し。らんや。小林氏もか  
 葛飾のあづき隅田のそり家あり。梅  
 木あり。ほり。梅あり。老夫あり。

やうそその家の名を梅が屋とす。年とら  
 春めし。何とこの花とのおほく立て。い  
 ろも庭の面。所せも。咲あはる。秋  
 萩の花。と花。葛花。いらくの花と。七と。や  
 せん。いよんみ。かく。浮岩遊行の徒  
 幫間敷妓の輩。花鳥。月雪。あらうと引く  
 あり。の老夫自稱。菊塙は薩と名の。も  
 あり。春海の。冠帽制  
 罷二百年。貴賤無等。皆露巔。士流半剃。餘雙鬢  
 畫史醫林薙髮全。別有隱居。托病老。又效僧飾

頭圓圓陸奥之人鞠估客稱隱忽逃編戶籍兀然驢首新衲衣名冒菩薩在大宅四民有業汝無營東走西奔任自適朝陪豪家金玉饌暮宿倡門桃李陌何羨遺世其情閑却笑道跡彼境僻隱乎隱乎得其所嗚呼莫浴昇平無涯津とくも今もは薩づづのちかぢをいふもこる此ほさの門よ吉原丸海花屋の花嬢會見とけいさるづづと寄進とありしよなべての僧寺ありせむ禁酒の碑ありしつぼきこととささるつら花は薩もあまを花とふ心まの歌をかんあひたりるほさ著述の神通かまろく春の七草秋の七草都島の三考とありはせり今志保

あしを又二考とくまろくほそんで五考とも著出をへんあなたちをのほ薩もあまの時梅やまといふ五とを句の上よおきていふもいふといふうづひもあまをいふとありしつぼきとねあまろくはろくらん  
弥生ののりもいふはよ大田元貞オホタノモトサダ其馨梁卯ヤナシノミヅルなごりもいふして深川フカガハとありはせりえういふのいふもいふしてやまをいふといふありる中よ木場キバをいふる時元貞がけいりる詩よ草軟野塘クサカマノノ宜意行小橋幾處水縦横花時不識此奇絶每過緑陰多是櫻梁卯オウがこもよ韻を次しる詩もありしとくもいふといふ砂村サコらとていふもいふ余があり



篋中留集五部。一、白香山。一、李義山。一、王半山。  
一、曾茶山。一元遺山。外此無有。因以五山名堂。  
有句云。家徒四壁立。書僅五山存。と書く。心  
をく。又の號を小釣雪ともいふ。楊誠齋が室を  
釣雪舟といひしとあつて。ある時。蟲  
轂の詩を流るり出たる。寫得清商曲自成。韓  
家那說不平鳴。笙歌沸處爭容汝。杖屨踈邊只  
任卿。莎徑蓼汀秋十里。殘燈破壁月三更。口頭  
織絡文章是滿地。擲來金石轂。告天子と  
流るり。絶句三詩あり。野烟初暖散朝陰。茶  
褐衣輕春已深。决起絶揚三四尺。帶轂稍上幾  
千尋。看看仰面眼將穿。午日薰人笠影圓。飛最

高時乍相失。轂微杳在彩雲邊。一身容易下雲  
梯。叫罷天闈日未低。斜落籬間無覓處。偶然認  
得菜花西。告天子。歌あり。あまのこめを  
さくさくせんせし。元人の古詩一首のこめを  
あまのこめと。今かくそのありさよと詠とせし。と  
いふ。五山堂詩話十六卷と著し  
て。陸續刊行せし。隋園詩話の卷に流るり。先  
中村彌大夫吉蓮入道。号を佛菴とせし。世に  
佛学者あり。真言密教の心ね  
と。悉曇の義理よくし。先





あをさきよくの機巧しき佛舍利を納奉る茶  
毗の灰とさくさめおきしりそのあやししく  
なるるひはあもいひはくせしむ此の意は  
しを入道がこころまよふ余別は天生佛像記を  
書ておくりしがあまはしをえてあるべし  
古今集秋下在原業平朝臣のしよ

うきうきは秋なまの時やささるらん花をさめ  
旅さしうきめやとめあらしめとハ雲却抄  
うきめ義とかせしむし打聞の標註あおほ  
かこの花はなまきしりさめまよふ散あわ  
ぬしうきしりさめと楚辭離騷は朝飲木蘭  
之墜露夕食秋菊之落英事文類聚後集廿

九の巻し。應邵が風俗通と引く。南陽郡鄴縣  
有甘谷水甘美云其山上有大菊落水從山下  
流得其滋液谷中有三千餘家不復穿井仰飲  
此水上壽百二三十中年亦七八十小説粹言  
第一回は王安石が西風昨夜過園林吹落黃  
花滿地金としりし詩を蘇子瞻とめて  
いしく。為何説這兩句詩是亂道一年四季各  
有名春天為和風夏天為薰風秋天為金風冬  
天為朔風和薰金朔四樣風配著四時這詩首  
句説西風西方屬金金風乃秋令也那金風一  
起梧葉飄黃羣芳零落第二句説吹落黃花滿  
地金黃花即菊花此花開於深秋其性屬火敢

與秋霜鏖戰最能耐久。隨你老來焦乾枯爛。並不落瓣。說个吹落黃花滿地。金豈不是錯誤了。興之所發。不能自己。舉筆舐墨。依韻續詩二句。秋花不比春花落。說與詩人仔細吟。さて蘇子瞻黃州より流るる。その國よりわりの時當重九之後。連日天大風。一日風息。東坡兀坐書齋。忽想定惠院長老曾送我黃菊數種。栽於後園。今日何不去賞玩一番。足猶未動。恰好陳李常相訪。東坡大喜。便拉陳慥同往後園看菊。到得菊花棚下。只見滿地鋪金。枝上全無一朵。諷得東坡目瞪口呆。半晌無語。陳慥問道。子瞻見菊花落瓣。緣何如此。驚詫東坡道。李常有所不

知。平常見此花。只是焦乾枯爛。並不落瓣。去歲在王荆公府中。見他咏菊詩二句。道。西風昨夜過園林。吹落黃花滿地金。小弟只道此老錯誤了。續詩二句。道。秋花不比春花落。說與詩人仔細吟。卻不知黃州菊花果然落瓣。此老左遷小弟到黃州。原來使我看菊花也。たゞかゝるは書あつても。これらも例ええつても。榮雅抄にも。餘材抄あつても。散りしと釋しつゝことなり。類聚國史七十五の卷。曲宴部。延曆帝の御歌。已乃已呂乃。志具禮乃。阿米爾。菊乃波奈。知利曾之奴。倍岐阿多良。蘇乃香乎。とよませ

八幡宮はもと豊前國宇佐郡は八幡といふ里あり  
 といふ。もとよきつものありしころ。やがて社の御名を  
 たへし。神名帳に豊前國宇佐郡八幡大菩薩  
 宇佐宮。もと石清水八幡宮護國寺略記に筑紫  
 豊前國宇佐宮なりとあり。むかし後の書にま  
 めく。あまのくわ宇佐郡坐八幡宮とありし  
 げり。そは續日本紀十七の卷。天平宝字元年十二  
 月の條に。戊寅遣五位十人。散位二十人。六衛  
 府舍人各二十人。迎八幡神於平群郡。丁亥の  
 詔に。豊前國宇佐郡雨坐廣幡乃八幡大神とい  
 えん。此外のよき書例のあつても。たゞ八幡ハ  
 地名なるべきなりしを。諸國は幡多。蟹幡。八幡など

り所ありしありて。そは彌重島。もと火田。此  
 略語なり。和名抄に野老傳云。横截山作島。謂之  
 截幡。其田先焼後耕。謂之焼幡。といえたるをも  
 考へし。あまのせきとあるべし。此八幡の神といふは  
 流りしより山城なるも。筑前對馬。その外の國に  
 なるも。これ八幡宮とありしなり。ハせしめて。神功  
 皇后緣起に。赤白の旗八流降し。起るし。とありし  
 たるも。もとよきつものありし傳會せしむるも。そを  
 松井元輔。字長民。号と梅屋といふも。陸奥國仙  
 臺人なり。かゝるし。流りし。もとよきつものありし  
 送。松浦乃候歸。故郷詩に。遂初賦。就拂衣去。妻  
 抱兩兒。僮負書。為喜先生見。機早絶。勝通老老。

移居

山本謹字公行。世稱と亮助と云ふ。山本信有が  
子あり。儒学よ名あり。兼く茶藝と  
嗜て。風流よ心をよせり。その居をバ緑陰茶寮  
と名づる。ある時。清閑聴雨  
坐。藜床。爐烟消盡。重添香。比。昨窓頭昏較早。讀  
残周易兩三行。

緗桃女史は山本謹が母あり。画よくし。名  
あり。花鳥はら。翠雲と云く。画と谷文晁よ。年。十二あり。墨梅よ。妙。書よ。琴よ。茶藝よ。挿花よ。香よ。

わびを得たり。こも山本謹が娘よ。美濃國大垣人。江馬蘭齋が女をた。海子と云く。書。画。琴。茶藝。香道。何れ道よ。画竹よ。妙。曉起の詩よ。長庚如李一星明。獨先啼。鴉繞砌。行。知道前宵微雨。過芭蕉。殘滴。兩三聲。おと名を。澹々。字を。緑玉。号を。細香。清水濱臣が。

卯なり。名所早春よ。寄硯懷舊。



學者たりらるるは、まゝあはしして、まゝしるべきの書は、  
いひゆるる。假字わく御國とも。美久近も書人  
さもあるべし。雅字は正さんや。古書の例よりりて  
中國とも。神國とも。九州とも。九原とも書つて、  
しるべし。雄略紀七年。于時新羅不  
事中國云云。同八年。新羅国背誕苞首不入於  
今八年。而大懼中國之心。脩好於高麗云云。續日  
本紀。一の卷八丁。度感鳴通於中國。於是始矣  
云云。此外六國史類聚國史類聚三代格。なごやの  
あひし。例あり。此は西土人が自稱て中國といふ  
その義と。しるべし。なごやのやぐより葦  
原中國といふ名もある。うへ。萬國孔真中に

秀たる御國あり。あはしるべし。なる書は、  
しるべし。神國といふ例も。神功紀。攝政元年。新羅王  
於是戰戰栗栗。厝身無所。則集諸人曰。云云。吾聞  
東有神國。謂日本。亦有聖王。謂天皇。必其國之  
神兵也。云云。とある。新羅王が美稱せし。號よて。  
しるべし。貴國ともいひしるべし。紀中はおほくんぬ。  
伊勢貞文が安齊隨筆三の卷。論ぜし。如く  
神道なるが故。神國と云ふ。非。と。日本後紀  
五の卷十七丁。留神國典。東鑑三卷。賴朝奏狀。我朝者  
神國也。汲冢。文覺上人。消息。日本國ハ神國也。  
他の國よりり。他の民よりり。我人と御誓あり。  
参考保元物語一の卷五十丁。吾國邊地粟散ノ

界ト云ドモ。神國タルニ依テ。書ク。神代紀上卷。於是陰陽始通合為夫婦。及至產時。先生淡路洲。此淡路洲為胞。廼生大日本。豐秋津洲云云。三善清行意見十二箇條。我朝家神明傳統。天險開疆。土壤膏腴。人民庶富。故東平肅慎。北降高麗。西虜新羅。南臣吳會。三韓入朝。百濟內屬。大唐使驛於焉。納賄。天竺沙門為之歸化。其所以爾者何也。國俗敦龐。民風忠厚。輕賦稅之科。踈徵發之役。上垂仁而下。下盡誠以戴上。一國之政。猶如一身之治。故范史謂之君子之國。唐帝推其倭皇之尊。ものんえんことを。神孔御國なるものゝあはく神國と書たりとのひり

るゝ。續日本紀十一の卷七丁。詔曰。朕君臨九州。字養百姓云云。本朝文粹二の卷。天慶三年正月十一日。官符。抑一天下。寧非王土。九州之内。誰非公民云云。本朝麗藻。高積善。詩序。九州之地。云云。經國集十の卷。釋空海。詩。九州八島云云。本朝文粹二の卷。贈故菅右大臣太政大臣。詔。九州云云。なごひは。西土めく九州とも。九原ともいふ。その義ありて書たる。此等孔熟字は諸書よこし。れんえんことを。今をゆひのりたるの。後舉あり。かくのり。雅字とも例おほく。まゝ大八洲。大倭。大日本。など書ん。のり。新皇國と。の書出する。のり。のり。

どや。さて右の熟字どもは中々の。中國といふは  
あつてくもつてあり。あやうらうめく。神國といふは  
はくぐべし。九州九原は。時宜し。あはれは書も  
こそせぬ。實はあのみ。ぬ字は。心をも。  
し。續日本紀九の卷四丁。是以聖王立制。亦務  
實。邊者。蓋以安中國也。云云。延喜式一の卷。歷運  
記。至庚申年。平定中國。云云。雄略紀二十三年。記  
方今。區宇一家。烟火萬里。百姓艾安。四夷賓服。此  
又天意欲寧區夏。云云。顯宗紀二年。大泊瀨天皇。  
正統萬機。臨照天下。華夷欣仰。云云。欽明紀三十一  
年。五月遣膳臣傾子於越。饗高麗使。大使審知  
膳臣。是皇華使。云云。儀制令。天皇詔書所稱。

皇帝華夷所稱義解。華。華夏也。夷。夷狄也。言  
王者詔誥於華夷。稱皇帝。即華夷之所稱。亦依  
此云云。賦役令。凡邊遠國有夷人雜類之所  
應輸調役者。隨事斟量。不如華夏。義解。夷。夷  
狄也。雜類。夷之種類也。華夏。中國也。云云。古事記  
序。愷悌歸於華夏。云云。新撰姓氏錄。序。神  
武臨夏。東征之年。云云。鷹受明命。光宅中  
州。云云。神武紀三丁。欲東踰膽駒山而入中州。云云。  
類聚三代格五の卷。元慶二年二月三日の官符。伏  
尋物情。陸奥出羽之在絶遠。尚限五年。因幡  
出雲之居中國。何得六年。云云。なごんえく。中  
國。區夏。皇華。華夏。中州。いづれも畿内近き國々

とす。秋津洲の大號オホは、わづらひ。此外大  
號オホは中土。寰中。寰宇。天下。海内。なども書きたり。も  
假字オホは、大八嶋國。葦原中國。豐葦原之水。德國。  
夜麻登。秋津嶋。師木嶋。なども書る例を宜長が  
國號考より見るがごとし。も、扶桑とす。扶  
桑集。扶桑略記。など書名への用ゝる。西土  
人ヒトが東方を指て扶桑と書るより、いへせ。所  
わづ。延喜式。東西文部が咒文。東至扶桑。西至  
虞淵。南至炎光。北至弱水。千城百國。精治萬歲。と  
あるがごとし。中國クニは、このは、いして東方を  
扶桑とす。と、近比えせ。その  
日東。大東。東方。など書出るものも、いへ。さして

異國の名は夷蠻戎狄と書むを論なり。古書の  
例より、んわ。清國を唐國。漢國。西土。西蕃。など  
と書べし。唐も。大唐とも書る例。史は、おほし。れど。  
大唐といふるを、いへ。西土と書るは、  
孝徳紀。十七丁は西土之君とあり。其外あり。西  
皇帝ニギハヤヒは、いへ。西蕃といふ。神功紀。七丁の  
高麗百濟の王が、いへ。後今以後。永稱西蕃。  
不絶朝貢とあり。加羅カの國名あり。三韓は  
總名あり。漢地の名あり。いへ。漢地  
諸越の字より、いへ。和訓ワニなる。漢地  
の總名より、いへ。例は、准て。西蕃と書るは、  
異國を指て常世國といへ。その

のりて宣長が古事記傳十二の巻九丁十七の巻九十二丁廿五の巻五十二丁がらう論トももこむ考て知べし。

松屋叢話卷第二終

*[Faint handwritten text in the right margin, likely bleed-through from the reverse side.]*

松屋高田先生著書

○俳諧歌論前編一二之卷

二冊

發句連句文章詩歌その外諸藝學問の道ふいゝまゝ。和漢に通考して正義と論をまゝ。學者至要の書之前編十卷の中三の巻を分て上中下とせしむ。全十二本あり。後編十巻と共に廿二冊の中二二の巻を文化九年梓行せり一の巻は俳諧といふ字義の論よりして俳諧連歌の始りといふ語釋俳諧といふ語釈長歌短歌片歌のり。和漢諸異國の樂の由来雅樂寮大歌所内教坊踏歌催馬樂風俗歌舞妓芝居などその外志終むるの由来とある。二の巻は發句といふる。季なれ句のさ。連歌式目の由来。連歌と俳諧のり。正風といふる。歌といふるれ心得。まゝ詩歌の六義の論をどく記をまゝ。

○同三之卷 上中下

三冊 今茲刊

連歌めぬやうにむといふるの論俗語のり。俳諧よ古んかといふるの論俳諧四躰よむすといふ論。まゝ古の發句ともなよるゝまゝを奉て注釋せしむ。

○竺志船物語旁註

二冊

は物語ハ大井三位物語として。村田春海先生の考證なるに  
僅小一の巻のそとさうして捨られたる條。校合して旁註せしめ  
之。源氏物語の中よりよるべき詞のなかりと擇んで。そのそと出  
らば。物語中。歌よみ。文うくる人よ。ちよ。益ある也。源氏物  
語の後。は竺志船よつて。そののたえて。竺志船といふは  
そのそと。の巻のそののなを。成やうて。標駁よ。なり。

○松屋叢話初編

一冊

天正慶長の比より。今の人までの車迹。或ハ詩歌書画諸  
伎藝。よ名あり。一語。何くれと譽ある話。よ。き。落。あ。れ  
なる話。めづ。ろ。な。活。か。ど。あ。り。あ。て。一。段。く。よ。出。ま。し。て。ま。い  
珍藏の宝器。天祥地異。ま。ま。も。り。よ。り。よ。り。ま。ま。の。せ。し  
ま。あ。る。ハ。故。事。の。考。か。ど。も。ま。ま。も。り。よ。り。よ。り。ま。ま。の。せ。し

○同二編

一冊

は未尚十編よ及までも。陸續あま。り。ま。ま。の。せ。し

○歌體辨

一冊 嗣刻

長。短。旋頭。混本。折句。沓冠。より。長歌。よ。賦。の。躰。古詩。り  
似。多。る。躰。の。別。樂。府。歌。俳。諧。連。歌。など。す。て。歌。の。諸。躰

○文體辨

一冊 嗣刻

と論別して世の歌人の心はさうに眼をむくは也。  
文章正則として。か。の。文。躰。明。辨。の。さ。る。ふ。編。ま。し。て。の  
長。し。て。い。ま。の。稿。と。終。ら。ま。る。が。ゆ。え。よ。ま。の。文。う。く。大。意  
と。記。し。て。祝。詞。宣。命。の。後。ハ。文。章。の。乃。絶。果。あ。る。よ。り  
論。し。ら。ば。文。躰。の。別。と。ま。ま。の。論。し。て。世。の。人。の。眼。を  
さ。ま。ま。の。せ。し

○古言補正

一冊 今年刻

古言様の誤を正し。又。ま。ま。の。詞。を。補。て。假。名。遣。の。法  
全。成。の。書。古。言。様。を。持。た。る。人。は。書。と。合。せ。ん。ず。ん。ば。あ。る  
べ。し。ま。ま。の。附。言。よ。和。漢。文。字。書。躰。の。治。革。よ。り。ま。ま  
假。字。の。よ。り。ま。ま。の。論。し。ら。ま。の。せ。し

○歴史歌考

七冊 嗣刻

六国史。類聚国史。よ。出。た。る。歌。も。童。謡。よ。い。た。ま。ま。の。せ。し  
古。き。諸。注。の。を。の。り。正。し。新。考。注。せ。し。た。る。也。

○千載集集成

○文集百首

○文章正則

○鹿嶋紀行

○國名考

○天竺佛像記

○衢杖占

○宇津々物語

○聲史考

梓行須原屋茂兵衛

江戸 英屋平吉

○古言蘇五

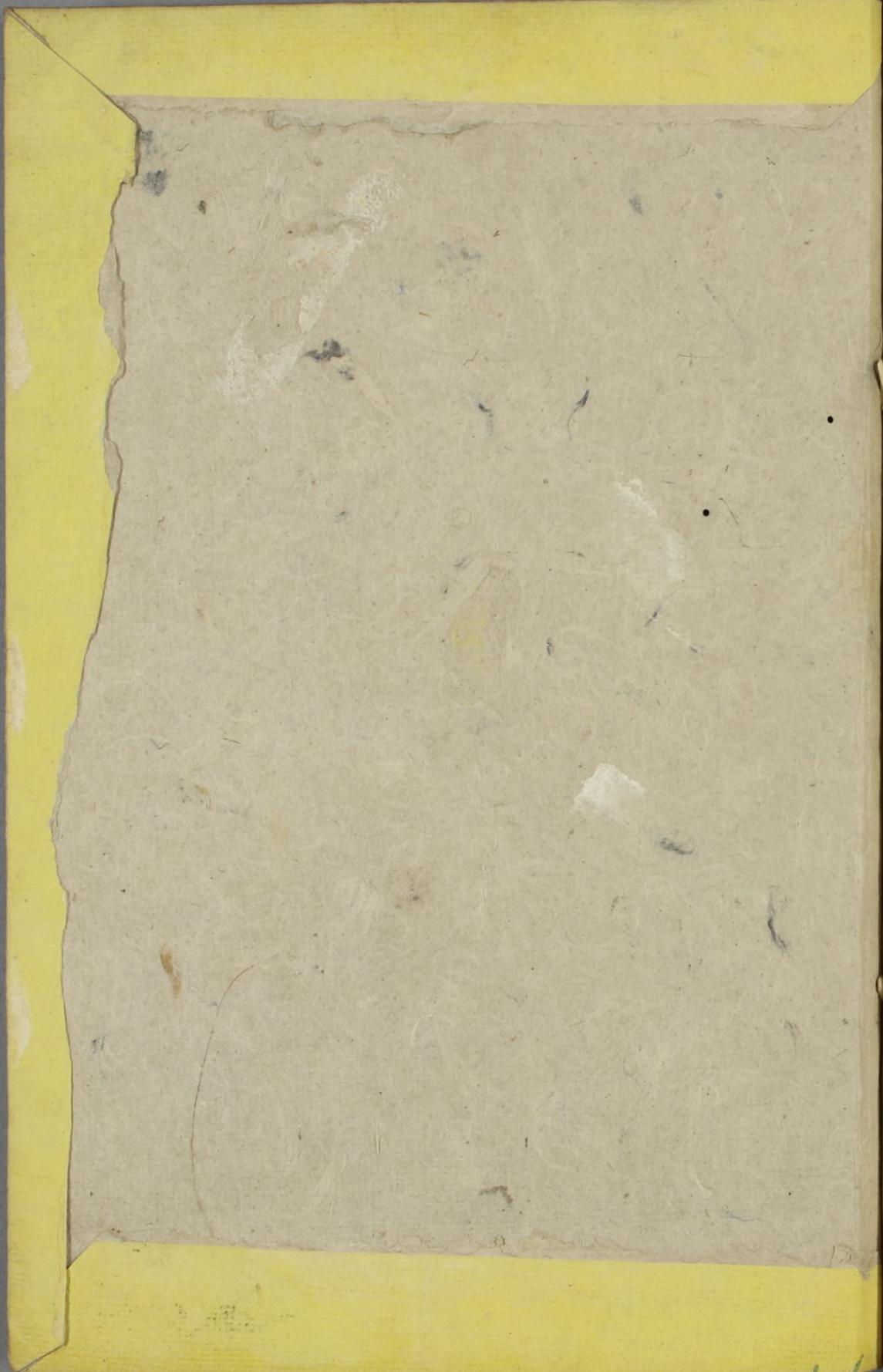
柏屋忠七

書林

京 勝村治右衛門

○文類集

大坂 大野木市兵衛



大島正則  
國名考  
獲故古

書林

○鹿嶋記行  
○天竺佛像記  
○津津大船語

菅井頼原屋茂兵衛

江戸 英屋平吉

柏屋忠七

水 勝村治右衛門

大坂 大野木市兵衛



Handwritten signature or mark in black ink, possibly reading '伊豆小島'.

